

ある日、昔のその村から出て、いまアメリカのある大学の教授になっている若い博士が十五年ぶりで故郷へ帰って来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあったでしょう。町の人たちも大ていは新しく外から来た人たちでした。

それでもある日、博士は小学校から頼まれて、その講堂でみんなに向こうの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出て、それからあの度十の林の方へ行きました。

すると若い博士は、愕ろいて何べんも眼鏡を直していましたが、とうとう半分ひとりごとのように言いました。

「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却って小さくなったようだ。みんなも遊んでいる。ああ、あの中に私や私の昔の友達がいないだろうか。」

博士は、にわかには気がついたように笑い顔になって、校長さんに言いました。

「ここは今は学校の運動場ですか。」

「いいえ、ここはこの向こうの家の地面なのですが、家の人たちが一向かまわないで、子供らの集まるままにして置くものですから、まるで学校の付属の運動場のようになってしまいました。実はそうではありません。」

「それは不思議な方ですね。一体どういうわけでしょう。」

「ここが町になってから、みんなで売れ売れと申したそうですが、年よりの方がここは度十のただ一つのかたみだから、いくら困っても、これをなくすることは、どうしてもできないと答えるそうです。」

「ああ、そうそう、ありました。ありました。その度十という人は、少し足りない私らは思っていたのです。いつでも、はあはあ笑っている人でした。毎日丁度この辺に立って、